

資料渉猟余話

その79

「明治三十三年とい...」
た。「小學新聞」といふ
へば私の十一歳の頃で
週刊新聞があつてそれ
あるが(中略)その時
に投書して賞を貰つた
分わたくしは詩よりも
のも俳句と散文とであ
歌又は句を余計に作つ
つた(下略)と『母を
たら、その「小學新



尋常科 生徒入退学名簿 (明治29年1月 追手町
小学校蔵)には樋口国登の名前が確認できるが...

偲ぶの記(三笠書房刊
昭和25年6月)にあ
る。実は随分前のこと
になるが、河出書房の
日夏全集編集の後、I
女史が箱詰にしたまま
図書館に保管されてい
た全集編集の残滓の段
ボール箱を確認してい
る。裏山の世枯れけり夜
半の風 樋口国登」
黄眠先生及び黄眠先
生と思われるの幼き日
の俳句は以下のもので
ある。

聞)が出てきたので
「季重ねが多いなあ」
などと思いつながら、
書き留めておいた。
「裏山の世枯れけり夜
半の風 樋口国登」
黄眠先生及び黄眠先
生と思われるの幼き日
の俳句は以下のもので
ある。

黄眠先生が行く 13

少年期の俳句

嶋 不濁

「弟の昼寝おかしき寝
言かな 樋口国登」
(小學新聞45号 明治
35年9月7日)
「秋の雨蓮の枯葉にた
まりけり 樋口静帆」
(同49号 明治35年10
月5日)
「わたる雁くの字とな

るものの、高等小学
校へ進んだという記録
はない。また小学校の
同級生たちの名前が確
認できる「高等」小学
校の卒業年次(飯田尋
常高等小学校沿革紀
要(明治41年9月)の
明治35年から39年の
「飯田尋常高等小学
校」の卒業名簿)にも
黄眠先生すなわち樋口
国登の名前はない。そ
して突然のように同書
の35年の飯田中学校入
学者名簿に他の同級生
とならんで名前が確認
できるのである。従来
の日夏年譜には明治36
年4月に中学校に35番
で入学したことになっ
ている。
このように、黄眠先
生の年譜には本人の記

述と年譜等に数年のズ
レがよく存在する。そ
れが勘違いなのか、意
図的なものなのか、研
究不足なのか、判然と
しない。研究者並びに
関係者諸氏の丁寧な踏
査が望まれる所だ。
ところで三笠書房の
『母を偲ぶの記』とい
う本は、黄眠先生が疎
開していた飯田在の山
本村から東京・阿佐ヶ
谷に戻った昭和22年12
月(5日)とも10日と
も、本人が記してい
る)以降、戦時中から
戦後にかけて、あちこ
ちに書き飛ばした随筆
や対談、果てはラジオ
収録を文字に起こした
りして出された本のよ
うだ。本来であれば収
載を見送りたいとなるよ
うな、黄眠先生にすれ
ば雑駁な対談なども多
く、活字に飢えていた
時代だったので出版で
きたような本にみえ
る。それ以前、昭和22
年3月に関書院出版し
た『秋の雲』にも収録
されている作品も多
く、その異同や出版の
経緯も興味あるところ
だ。



＊好評発売中！
嶋不濁著『黄眠先
生が行く 日夏歌
之介残影』
(南信州新聞社刊)